

〔会員新刊紹介〕

角鹿尚計著

『橋本左内——人間自ら適用の士あり』

じんかん

ミネルヴァ書房

(二〇二三年二月刊)

山田 裕輝

本書は、幕末期に政治思想家・志士として活躍した福井藩士橋本左内の評伝である。橋本左内は、十六代福井藩主松平春嶽（慶永）とならび、幕末期福井藩の代表的な人物として著名であり、歴史研究者や作家によって数々の伝記・論考・小説が著されてきた。しかし、橋本左内の生涯および後世の評価を考察した本格的な評伝となると、近年では山口宗之『橋本左内』（吉川弘文館、一九六二年）までさかのぼらなければならない。つまり、本書は六十一年ぶりに上梓された橋本左内の本格的な評伝ということになり、県内外で注目されうる一書といえるだろう。

本書を著した角鹿尚計氏（以下、著者）には、既刊に『由利公正』（ミネルヴァ書房、二〇一八年）があり、それに続く幕末期福井藩の人物評伝である。著者は、一九八三年から二〇二一年の定年まで四十年近くを福井市立郷土歴史博物館で学芸員として勤務し、同館が所蔵する橋本左内ゆかりの史料を誰よりも近くで、長年にわたり取り

扱ってきた。著者が学芸員として蓄積してきた識見と、左内の郷土福井での生活によって育まれた情緒が込められた本書は、既存の左内観を再考し、その総合化を目指すものとなっている。
本書の主な構成は以下の通り。

はしがき

第一章 生誕と家系・家族

第二章 少年時代

第三章 蘭学と医学

第四章 教育と思想

第五章 国事奔走と安政の大獄

第六章 幽囚生活と最期

第七章 没後の栄光と評価

あとがき

まず、はしがきで本書の目的が示される。著者は、橋本左内について幼少期から明晰、敢為、高潔、老熟、純忠の士であり、ひらめきと行動力を兼ね備え、そして広大かつ高度な知識と識見を持ち、秀作・佳作の漢詩を多数残すなど、「幕末期の偉人と称される先哲の中でも抜きんじて遜色なき人材」と激賞する（i頁）。しかし、戦前に救国の俊秀と称賛されてきた橋本左内の評価は、戦後になると「偉人」としての高い評価に疑問符がつけられるという研究動向の転回にも言及する。それを受けて、著者は一次史料の丹念な読み込み

を通じて左内の精神や個性を明らかにし、「総合的な視野でこれまでに最も詳細な橋本左内伝の執筆を試みた」と表明する（vi頁）。

第一章では、左内の家系、家族、子孫、菩提寺と家僕、左内の名乗りといった、個人の評伝としてまず踏まえておくべき基礎的な情報が提示される。その内、近年明らかになった左内の父長綱の家系について詳細に触れているのは注目すべきである。長綱は越前朝倉家の遺臣・真柄十郎左衛門を先祖に持つ福井藩医田代家の出身であり、その「武家の血」に対する強い意識が長綱を通じて左内に受け継がれていたと考察する。

第二章は、左内が代表的な著作『啓発録』を執筆する嘉永元年（一八四八）までを「少年時代」とし、少年左内の人となりや学問修行の遍歴をまとめている。著者は、左内の学識や人脈の形成に大きな影響を与えたのが福井藩の崎門学者吉田東篁であると強調し、左内の精神的な基盤に崎門学があることを重視する。また、崎門学が内包する国学との親和性を考慮し、左内の読書遍歴から彼の属性を「国学の教養・影響を多分に受けた崎門学者」（四六頁）と規定している。その上で、『啓発録』が崎門学の影響下で著されたものと理解し、左内が晩年期に付した自跋と併せて、「人間左内」という個性の形成は、『啓発録』に始まり『啓発録』に終わる」（六一頁）と高く評価する。

第三章は、嘉永二年から安政三年（一八五六）にかけての大坂・江戸遊学期が対象となっている。著者は、この期間を左内が藩官僚・志士として成長していく重要な時期とみる。それは、著者が左内の

明道館改革における諸政策の原点を、学問の下での平等という適塾での経験に求めている点からも察せられよう。また、大坂遊学期の梅田雲浜・横井小楠との出会いや、江戸遊学期における鈴木主税や水戸藩士、そして西郷隆盛との出会いを通じて、左内が藩官僚・志士としての自意識を強固にしていく過程が、左内書簡の引用を通じて鮮やかに描き出されている。

第四章は、左内の福井藩士登用後最初の大仕事である藩校明道館改革を端緒に、左内が藩政府および藩主松平春嶽の信頼を獲得していく過程と、藩をこえた国家的な視野と先駆的な政体論が形成されていく様子を述べている。ここでは、あえて一点指摘しておきたい。

本書の一四六頁において、著者は安政三年四月二六日付の中根雪江宛橋本左内書簡（『橋本景岳全集』七七号文書）を引用し、左内が神武天皇の孫謀・遺徳として、人々は忠義を重んじ、武士は武道を尚ぶという二か条が日本の国是であると述べており、これを左内の明確な国体論だと断言する。ただ、左内は同文書の冒頭にて、国是の一般論として「祖宗トテモ深智巧慮して御編み出し被成候ニては無之、但天地然一定之理ニ御基被遊、時勢人情を御斟酌被為在、衆人之心一同趣向致し候処ヲ御考合せ被成、国是御立被遊候也」とも述べている（『橋本景岳全集』上、一九三九年、一〇六頁）。左内が天皇の存在を中核として政体のあり方を構想していたのは著者が述べる通りだが、時勢や人情に応じて神武天皇以来の「国是」を再解釈する余地を左内が同一書簡で示している点は考慮されるべきだろう。

第五章は、嘉永六年（一八五三）のペリー艦隊来航に端を発する

条約問題とその前から懸案となっていた將軍継嗣問題に対し、左内が藩主春嶽の懷刀として深く関与していく過程が克明に描かれる。この時期の左内は、幕府からの諮問に対する藩主春嶽の答申の起草にあたり、西郷隆盛と協同した江戸城大奥の政治工作を主導し、幕閣や宮中の説得工作に奔走している。本章により、左内が一橋派による政治運動の中心に位置していたことを強く認識させられる。しかし、周知のとおり將軍継嗣問題は、春嶽が一橋派の敗退に終わり、春嶽は隠居・急度慎の沙汰を受ける結果となった。そのため、藩地では、南紀派の一員として動いた老中間部詮勝の鯖江藩との間に緊張関係が生じた。著者は、その様相を丹生郡大虫村に鎮座する大虫神社の神官岡野吉孝の日記に依拠して描いており、安政の大獄が地域社会に与えた影響を考える上で非常に興味深い。

第六章は、安政の大獄後における左内の幽囚生活、幕府による尋問への応対、そして死罪が下されるまでの経過と福井藩の動揺を詳細に描いている。著者が指摘するとおり、安政の大獄で逮捕された左内本人や、謹慎生活を送る藩主春嶽、そして福井藩関係者の面々も、左内が死罪になることはないと樂觀視していたのだろう。幕府の取り調べに対する左内の態度や、藩関係者の対応の遅さが、そのことを物語っている。逆に言えば、大老井伊直弼が橋本左内に対して強い危機感を持っていたことの表れともいえる。左内没後、福井藩政は混乱状態に陥り、その収束は万延元年（一八六〇）二月の横井小楠第二回福井来訪まで待たねばならなかった。

第七章は、左内への追悼・顕彰運動について、左内没直後から現

代までの経過を丁寧にとめている。顕彰団体の興廃や設立趣旨の違いはあるものの、現代に至るまで福井と東京それぞれに左内の顕彰団体が運営されている点を明示した点は、左内顕彰の位置づけを考える上で注目すべきだろう。また、左内の評価が明治、大正、昭和戦前期、昭和戦後、平成・令和とさまざまな展開と転回を見せているのは、著者が指摘しているとおりであり、特に昭和戦後期に顕著な左内へのネガティブな論評に、著者は「無責任で軽薄な思い付き」と厳しく断ずる。しかし、これらの論評は、昭和戦前期に国家の政策と結び付いて展開された左内顕彰への反発を含んでいる、という側面を考慮しておくべきではないか。こうしたネガティブな左内評が合わさることで、顕彰一辺倒だった左内評に新たな視点を付け加えたという積極的な意義があると本稿筆者は考える。いずれにせよ、橋本左内という福井を代表する歴史的個性とどのように向き合っていくかは、福井に生きる研究者・教育者・市民に突き付けられた課題であると痛感する。

以上、本書の内容を簡単ながら紹介した。感想が多分に含まれ、バランスを欠いた紹介となっているが、あくまで本稿筆者の能力に帰するものと了解願いたい。

なお、本書は、橋本左内の評伝という性格上、当然ながら左内を中心軸に据えた叙述となっている。しかし、左内が福井藩内で存在感を発揮する起点を適塾入塾後に藩から褒賞の遣使を受けた嘉永二年（一八四九）としても、わずか十一年であり、福井藩の幕末維新期全体の動向において左内の位置づけを考えるには他書の参照が必

要だろう。その場合は、高木不二『横井小楠と松平春嶽』（吉川弘文館、二〇〇五年）と、本川幹男ほか著『幕末の福井藩』（岩田書院、二〇二〇年）を併せ読むことを読者にはお薦めしたい。